

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終おき圧えつけていた。焦躁せうと言おうか、嫌悪と言おうか：酒を飲んだあとに宿酔かつふよがあるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がってしまったくなる。何かが私を居堪いたたまらずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋が覗のぞいていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、と言つたような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかつていたり：勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵ひまわりがあつたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか：そのような市へ今自分が来ているのだ：という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団ふとん。匂いのいい蚊帳かやと糊のりのよくきいた浴衣。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希ねがわくはここがいつの間にかその市になつているのだつたら。錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安つばい絵具で赤や紫や黄や青や、さまざまの縞模様しまを持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、

枯れすすき。それから鼠火花ねずみというのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心をそそった。

それからまた、びいどろという色硝子で鯛たいや花を打ち出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉なんきんだまが好きになった。またそれを嘗なめてみるのが私にとってなんともいえない享樂だったのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落ちぶれた私に蘇えってくるせいだろうか、まったくあの味には幽かな爽やかななんとなく詩美と言つたような味覚が漂つて来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とは言えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅沢ぜいたくということが必要であつた。二銭や三銭のもの……と言つて贅沢なもの。美しいもの……と言つて無気力な私の触角にむしろ媚こびて来るもの。そう言つたものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕むしまれていなかった以前私の好きであつた所は、たとえば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持つた琥珀色や翡翠色の香水壺。煙管、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等しい鉛筆を一本買うくらいは贅沢をするのだった。しかしここももうその頃の私にとっては重くるしい場所に過ぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃は甲の友達から乙の友達へというふうな友達の下宿を転々として暮らしていたのだが——友達が学校へ出てしまつたあとの空虚な空気のなかにぼつねんと一人取り残された。私はまたそこから彷徨さまよい出なければならなかつた。何か私を追いたてる。そして街から街へ、先に言つたような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留まつたり、乾物屋の乾蝦ほしえびや棒鱈ぼうたらや湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、その果物屋で足を留めた。ここでちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知つていた範囲で最も好きな店であつた。そこは決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあつて、その台と

いうのも古びた黒い漆塗りの板だつたように思える。何か華やかな美しい音楽アッレグロの



その日私はいつになくその店で買物をした。というのはその店には珍しい檸檬れもんが出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。いったい私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰まった紡錘形ぼうすいの恰好かっこうも。——結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊かたまりがそれを握った瞬間からいくらか弛ゆるんで来たともみえて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗しつこかつた憂鬱ゆううつが、そんなものの一顆いっかで紛まらされる：あるいは不審なことが、逆説的なほんとうであつた。それにしても心というやつはなんとという不可思議なやつだろう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故せいだつたのだろう、握にぎっている掌から身内に浸み透とおつてゆくようなその冷たさは快いものだつた。

私は何度も何度もその果実を鼻に持つていって嗅かいでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上つて来る。漢文で習つた「売柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲うつ」という言葉がきれぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂におやかな空気を吸い込めば、ついで胸一杯に呼吸したことのなかつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来てなんだか身内に元気が目覚めて来たのだつた。……

実際あんな単純な冷覚や触覚ふしや嗅覚かや視覚しが、ずっと昔からこればかり探していたのだと言いたくなつたほど私にしっくりしたなんて私は不思議に思える：それがあの頃のことなんだから。

私はもう往来を軽やかな昂奮こうふんに弾んで、一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩かっほした詩人のことなど思い浮かべては歩いていて。汚れた手拭の上へ載せてみたリマントの上へあてがつてみたりして色の反映を量つたり、またこんなことを思つたり、……つまりはこの重さなんだな。

その重さこそ常づね尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、思いあがった諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えてみたり：なにがして私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れるように思えた。

「今日は一つ入ってみてやろう」そして私ははずかずか入って行った。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壺びんにも煙管にも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱ゆううつが立てこめて来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！ と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出してはみる、そして開けてはみるのだが、克明にはぐってゆく気持はさらに湧わいて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなつてそこへ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまひには日頃から大好きだったアングルの橙色の重い本までなおいつその堪えがたさのために置いてしまった。：なんとという呪のろわれたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し終わつて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味わっていたものであった。

「あ、そうだそうだ」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。

「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮こうふんが帰つて来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去つたりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなつたり青くなつたりした。

やっとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえっていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こつた。その奇妙なたくらみはむしろ私をぎよつとさせた。

